

# 現代児童の生活実態に関する研究

## — 乳幼児の事故と安全教育 —

研究第7部 高橋種昭・須永 進  
 研究第2部 斉藤幸子  
 研究第8部 星 美智子・湯川礼子  
 川島秀二(あかいとり幼稚園)  
 萩原英敏(淑徳短期大学)

### 3. 調査結果および考察

#### 1. 研究の目的

近年、幼児期の子どもの死亡原因の首位は常に事故死によって占められている。

本研究では、こうした幼児の事故の実態を明らかにし、その発生機序について研究を進めることを目的としている。特に、今回は幼児をもつ母親が、どのように幼児の事故を認識し、事故防止のために普段からどういった配慮をなしているかを明らかにし、今後の母親にたいする安全教育を行う場合の参考にすることを第一義としている。

#### 2. 研究の方法

研究方法としては、東京都内にある私立A幼稚園の園児の母親約400名を対象に、質問紙法によって、幼児が複数の場合は長子をケースに、事故についての安全認識の調査を実施した。実施にあたっては各クラスの担任を通じて質問紙を親あてに配布。

質問紙の具体的な内容は、過去一年間に発生した事故「医師にかかったもの」の有無とその内容、過去において大きな事故になりそうだった経験の有無、周囲の居住環境と危険性への認識、さらには事故防止のための具体的な方策(手だて)などについてたずねるとともに、子どもの日常生活を想定した場面の写真(3枚)と絵(1枚)を示し、それぞれの場面での潜在的危険度に関して質問をこころみた。

調査は1989年1月に実施し、回収率は約70%であった。

#### (1) 回答者と年齢

今回のこの質問紙の回答者は、すべて母親となっており、その年齢は、次の図1となっている。全体的には、30~40歳までの母親が約8割近くを占め、次いで25~30歳、40~45歳と続いている。

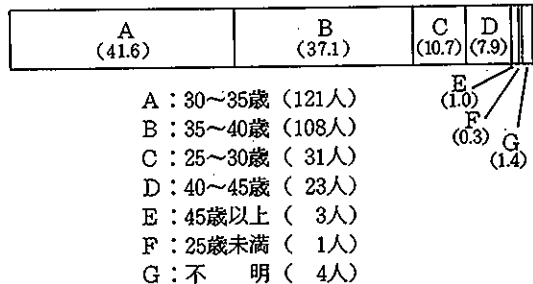


図1 回答者の年齢

#### (2) 対象児の出生順位

調査対象となった園児の出生順位は、次の表1となっている。

半数以上の園児が長子(55.0%)で、現時点での第3子は1割にみえない。この幼稚園の場合に限ってみると、きょうだい数の少数化がうかがえる結果となっている。

表1 出生順位

出生順位	人数 (%)
第 1 子	160 ( 55.0 )
第 2 子	104 ( 35.7 )
第 3 子	27 ( 9.3 )
合 計	291 (100.0 )

### (3) 対象児の年齢

今回、調査対象となった園児の年齢の割合は次の表2のようになった。

対象児の年齢構成は、表2から5歳から7歳未満までが全体の75%近くを占めている。

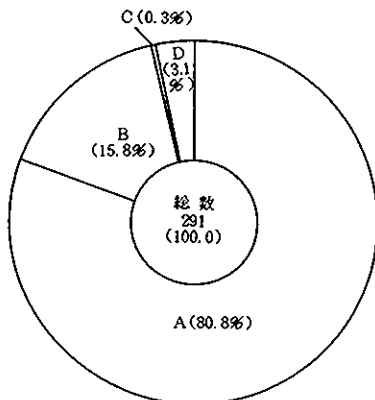
表2 対象児の年齢

年齢	人数 (%)
3～4歳未満	9 (3.1)
4～5 "	62 (21.3)
5～6 "	124 (42.6)
6～7 "	94 (32.3)
不明	2 (0.7)
合計	291 (100.0)

### (4) 家族の構成

対象児の属する家族の構成を核家族、同居(三世代)家族、単親家族の三つの形態に分けると、図2のように表わされる。

社会経済の構造上の変化につれ、都市部を中心に核家族化が進む中で、この地域における家族構成も、同様の傾向を示している。すなわち、図2にみられるように、全体の8割が核家族で占められる一方、三世代家族と呼ばれるこれまでの家族形態の世帯は、わずか、16%弱程度にとどまっている。



A:核家族 235人  
B:三世代家族 46人  
C:単親家族 1人  
D:その他 9人

図2 家族形態

そのため、同居するおとなの人数と子どもの人数についても、少数化傾向が表われている。(表3-a, 表3-b)

次いで、家族の構成人数をみると、次のグラフのようになる。(図3)

表3-a おとなの人数

おとなの人数	人数 (%)
1人	1 (0.3)
2人	234 (80.4)
3人	31 (10.7)
4人	18 (6.2)
5人	4 (1.4)
6人	2 (0.7)
10人以上	1 (0.3)
合計	291 (100.0)

表3-b 子どもの人数

子どもの人数	人数 (%)
1人	28 (9.6)
2人	199 (68.4)
3人	59 (20.3)
4人	4 (1.4)
5人	0 (0.0)
6人	1 (1.3)
合計	291 (100.0)

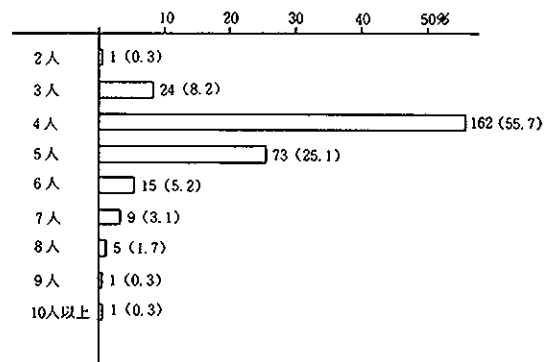


図3 家族の構成人数

これによると、3～5人の家族が全体の約9割を占めており、核家族化の進行とともに、家族の少数化の傾向がみられる。

(5) 住居形態

対象児の住居形態は、今回調査したA幼稚園が大規模な団地の中に位置しているため、団地のような集合住宅に居住している園児が、7割(70.8%)に達しているのが特徴となっている。(表4)

表4 住居形態

住居形態	人数(%)
1戸建て	83(28.5)
集合住宅	206(70.8)
不明	2(0.7)
合計	291(100.0)

なお、居住の階数については、1階から5階までに居住している園児が全体の6割強(62.7%)となっており、6階以上の高層階数には、6.2%の18名となっている。(またこの他、N・Aは、30.9%にあたる90名いた。)

(6) 住まいの周辺の状況

対象児の住まいの周辺は、図4に示されるように、圧倒的に住宅地となっている。この他、工業地域が11.3%(33名)、次いで商店街となっており、農業地域は皆無であった。

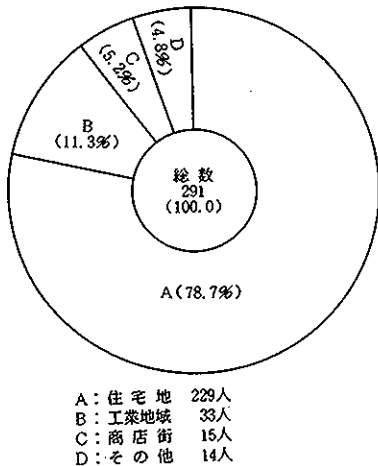


図4 住まいの周辺の環境

(7) 居住周辺の交通量

住まい周辺の交通量にたいする母親の回答は図5に表わされる。

それによると、交通量が「非常に多い」、「多い」と回答した割合は、63.6%となっており、6割以上の園児が

A (7.2)	B (56.4)	C (34.7)
---------	----------	----------

- A: 非常に多い (21人)
- B: 多い (164人)
- C: 少ない (101人)
- D: ほとんどない (5人)

D (1.7)

図5 住まい周辺の交通量

交通量の多い地域に住んでいることが明らかになっている。反対に「少ない」、「ほとんどない」は36.4%であった。

(8) 主な遊び場

対象児が主に遊ぶ場として、家の中と外ではどちらが多くになっているか、については次の図6に示される。

これによると、家の周辺の交通量が比較的多いと回答した率が過半数を上回っていることや、全体的に戸外遊びが減っている傾向もあって、家の中で遊ぶ園児が全体の半分以上を占めている。このことは、家の周辺の交通事情が、少なからず園児の戸外での遊びを制限しているとも言えなくはないであろう。

A (54.3)	B (10.3)	C (35.1)
----------	----------	----------

- A: 家の中が多い (158人)
- B: 家の中(戸外)が多い (30人)
- C: どちらともいえない (102人)
- D: 不明 (1人)

D (0.3)

図6 主な遊び場

(9) 戸外での遊び場

対象となった幼児が実際に外で遊ぶ場合、どのような場所で遊んでいるかについては、図7となっている。

これによると、9割近い園児が、公園や児童遊園で遊んでおり、次いで友だちの家、住宅敷地内の車が通らない場所と続いている。しかし、その反面、車の通る道路や住宅敷地内で遊ぶ園児も一部みられるなど、幼児にとって決して安全な場だけで遊んでいるとはいえない状況がこの結果から知ることができる。そういった現況をふまえて、親や保育者による安全への配慮や指導がより一層不可欠となってくるであろう。

(10) 主な通園手段

幼稚園への通園手段については、通園バスを利用する幼児が半分以上あり、次いで、徒歩、自転車、自家用車の順となっている。(図8)

(11) 過去1年間の事故

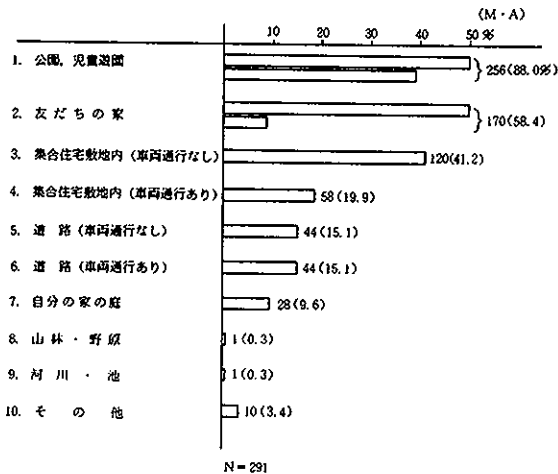


図7 遊び場

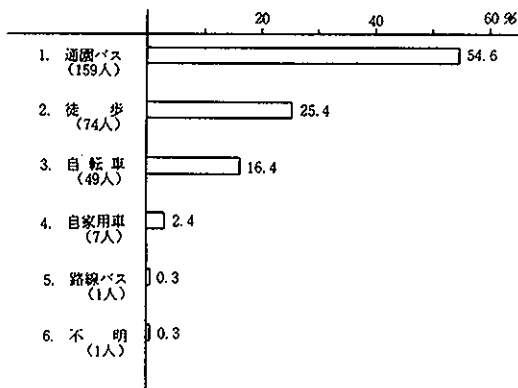


図8 主な通園手段

これまでの1年間に医師の手当てをうけた幼児の事故については、12.4%にあたる36人が事故にあったという結果が得られた。(表5)

この他に、何んらかの事故にあいながら、医師の手当てをうけなかった幼児がいることも十分に考えられることから、実数はこの結果よりは若干多くなるものと思われる。

表5

事故経験の有無	人数 (%)
事故経験 有	36 (12.4)
事故経験 無	255 (87.6)
合計	291 (100.0)

## (12) 過去1年間の事故の回数

過去1年間に経験した事故の回数については、1回が33名(11.3%)、2回が1名(0.3%)となっている。(なお、不明が2名)

## (13) 過去に経験した事故

次に、過去1年間に限らず幼児がこれまでに経験した事故のすべてについて、事故による被害の種類、事故時の年齢、性別、原因の順で回答をもとめたが、その結果は次の通りであった。

### ① 事故の種類

事故の種類ではどんなものが多いか、をみると、表6となっている。

表6 事故(ケガ)の種類

事故(ケガ)の種類	人数 (%)
1. 転落	35 (12.0)
2. 転倒	25 (8.6)
3. 交通事故 (乗り物に乗っている)	15 (5.2)
4. 衝突	14 (4.8)
5. はさむ	12 (4.1)
6. 交通事故(歩行中)	11 (3.8)
7. 火傷(やけど)	11 (3.8)
8. 交通事故(飛び出し)	4 (1.4)
9. 溺水	2 (0.7)
10. 交通事故 (道路、駐車場で遊んでいて)	1 (0.3)
11. その他	10 (3.4)
12. 不明	151 (51.9)
合計	291 (100.0)

これによると、対象児の事故では、転落や転倒によるものが多く、次いで交通事故となっている。他には、衝突、はさむ、火傷(やけど)と続いている。一般には子どもの事故で溺れが上位を占めているが、ここでは、地域的に溺水がよる事故はきわめて低くなっているのが特徴として表われている。

### ② 被害の種類

事故による被害の種類では、表7に示されるように、切り傷が一番多く、次いで骨折、打撲、火傷の順になっている。

### ③ 事故時の年齢

事故時の幼児の年齢は、3歳児の時が最も多くなっている。おそらく、少しずつ親の手を離れて、自己活動の範囲が拡大し始める年齢であるためと思われる。また、

表7 (M・A)

被害の種類	人数(%)
1. 切り傷	38 (27.1)
2. 骨折	19 (13.6)
3. 打撲	16 (11.4)
4. 火傷	13 (9.3)
5. すり傷	5 (3.6)
6. その他の外傷	4 (2.9)
7. 刺し傷	1 (0.7)
8. 外傷(種類不明)	3 (2.1)
9. その他の被害	2 (1.4)
被害なし	7 (5.0)
不明	32 (22.9)

N = 140

1,2歳の時期も次いで多くなっており、年齢の上昇とともに、事故の発生件数は減少している。このように、幼児の事故は3歳時前後が一応のピークであると考えられる。(表8)

④ 該当児の性別

該当児の性別をみると、男児が51.4%、女児が40.7% (不明7.9%) となっている。すなわち、男児の方が10%程度、高い割合を示している。おそらく、一般的に男児の方が女児よりも動きが活発で、活動的であることが多いため、事故やそれに伴うケガの発生率が高くなっていると思われる。

表8 事故時の年齢

年齢	人数(%)
0 歳	3 (2.1)
1	19 (13.6)
2	19 (13.6)
3	29 (20.7)
4	17 (12.1)
5	10 (7.1)
6	6 (4.3)
不明	37 (26.4)

N = 140

⑤ 事故の原因

事故の原因と思われる項目では、表9の結果となっている。まず、幼児自身で自転車に乗っていてが一番多く、次いで階段・ベランダ・ドアによる事故、さらには家具、TVによるもの、石・コンクリートなどによるものの順となっている。この他、すべり台やブランコなどの遊具

によって引き起こされる場合も少なくない。この表9から対象児の事故は主に、1.交通事故、2.家庭内事故、3.遊具による事故の三つに大別されると考えられよう。したがって、幼児の事故に限ってみると、それをいかに防ぐか、より具体的な対策を立てることが必要となっている。

表9 事故の原因

項目	人数(%)
1. 自転車(自分が乗っていて)	22 (15.7)
2. 階段・ベランダ・ドア	21 (15.0)
3. 家具・TV	13 (9.3)
石・コンクリート	13 (9.3)
5. すべり台	11 (7.9)
6. 自動車	10 (7.1)
7. ストープ・アイロン	6 (4.3)
熱湯・汁物	6 (4.3)
9. すべり台・ブランコ以外の大型遊具	4 (2.9)
バイク	4 (2.9)
11. 自転車(相手が乗っていて)	3 (2.1)
ブランコ	3 (2.1)
13. 浴室	2 (1.4)
おもちゃ、ボール、バット	2 (1.4)
刃物、缶切り	2 (1.4)
16. 川、海、池	1 (0.3)
その他	14 (4.8)
不明	3 (2.1)

N = 140

⑥ 過去の幼児の行動(ニアミス経験)

これまでに自分の子どもを含め、子どもが事故に会いそうな場面に遭遇した経験の具体的な内容について次のような回答が得られた。(表10)

これによると、幼児の飛び出しや乗り物に乗っていて

表10 (M・A)

項目	人数(%)
1. 交通事故(飛び出し)	72 (47.1)
2. " (乗り物に乗っている)	26 (17.0)
3. " (歩行中)	16 (10.5)
4. 実際の事故についての記述	13 (8.5)
5. 遊具によるもの	8 (5.3)
6. 交通事故(道路、駐車場で)	6 (3.9)
7. 行方不明	11 (0.6)
その他	1 (7.2)

N = 153

などの交通事故に関係するものが圧倒的に多く、全体の7割強を占めている。活動がさかになる幼児期は、とかく交通事故にまきこまれるケースが多いことを、今回の調査で改めて確認されたといえる。また、それほど多くはないが、遊具によって引き起こされる事故もみられるので、遊具のより安全な使い方の指導が強くもめられてこよう。

⑦ 危険な場所と危険防止の手だて

住まいの周辺で、子どもが遊ぶうえで危険と思われる場所を具体的にあげてもらった質問では、次のような回答の結果となった。(表11)

表11 危険と思われる場所

場 所	人数 (%)
1. 車 道	52 ( 17.9 )
駐 車 場	13 ( 4.5 )
3. 集合住宅敷地内	11 ( 3.8 )
4. 交 差 点 (T字路)	8 ( 2.7 )
塵, 坂, 塀	8 ( 2.7 )
6. 路上駐車	6 ( 2.1 )
7. 公 園	5 ( 1.7 )
8. 階段・ベランダ・マンションの 屋上	4 ( 1.4 )
9. 貯水槽・池	3 ( 1.0 )
10. 工事中の道	1 ( 0.3 )
そ の 他	6 ( 2.1 )
不 明	174 (598 )
合 計	291 (100.0)

それによると、N・Aの回答を除き、危険と思われる具体的な場所としては、家の前や信号のない車道が一番危険な場所と認識している親が多くなっている。次に、駐車場、車の通る集合住宅敷地内、さらには交差点(T字路)など、危険度の高い場として車の通行にかかわる場所を指摘している。この他、車の通行とは別に、塵や坂のある場所をはじめ、貯水槽・池、工事中の道など幼児にとって危険の度合の高い所を十分に認識している親もみられた。

また、「その他」の回答としては、家や道路の出入口をあげているものが多くあった。

次に、そういった危険な場所にたいする防止のための手だて(防止策)について親たちは、次のような点に気を配っているという結果がでた。(図9)

まず、住居周辺の場で子どもにとって危険と思われる場所について親の多くは、日頃より子どもに言い聞かせ

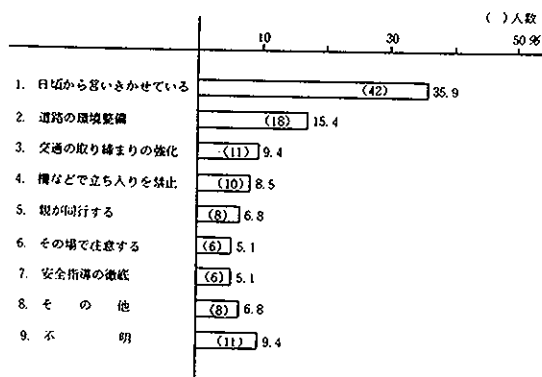


図9 危険な場所への配慮

たり、その場で注意するなどのしつけや教育を行なっている。また、道路や交通の整備・取り締まりなどの周辺環境の整備の必要性や、実際的な子どもやドライバーへの安全指導の徹底をもとめる親も少なくなかった。

⑧ 安全への確認と指導

普段、子どもの安全に関して気を配っていることは何か、という質問にたいしては次のような回答が得られた。(図10)

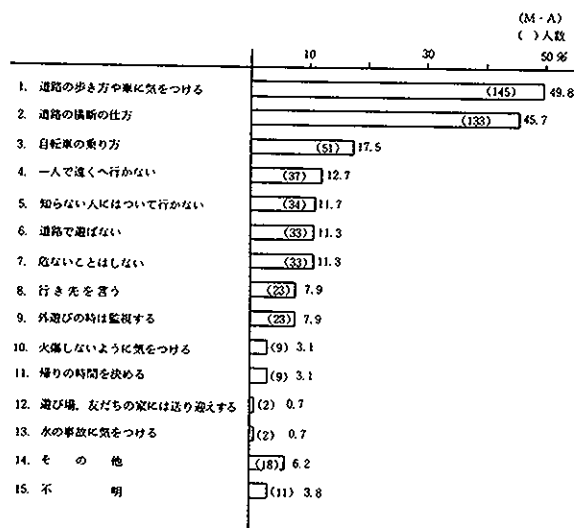


図10 安全への配慮

この結果によると、車や歩行、自転車などの交通事故にかかわる項目をあげている親が多く、次いで、一人で遠くへ行かない、知らない人について行かない、行き先を言うなど、幼児の誘拐事件や行方不明による事件・事故にたいする親の関心の高さが表われている回答もみられる。また、全国的なレベルで子どもの事故が多いとい

われている水の事故は、地域周辺に河川や池などが無い  
ため、指摘する親が少なくなっている。

この他では、子どもの遊んでいる様子がわかるように  
する、後から大声をかけて追いかけるなどとなっている。  
さらに、この幼児期によくみられる「けんか」では、石  
や木をもたないように注意するといった回答が一部にみ  
られた。

#### (16) 写真と絵による親の安全認識度について

##### ① 道路を歩行中の親子

道路を歩行している親子の写真を見て、その危険性の  
有無と、危険と思われる箇所について具体的に記述して  
もらう質問となっている。結果は次の通りである。(表12)

この歩行中の親子の写真では、「大変危険」「少し危  
険」と、危険性があると答えた親が、99%と、ほぼ全員  
に近い割合を占めており、反対に「危険ではない」がわ  
ずか1名であった。

表12

項 目	人 数 ( % )
大 変 危 険	204 ( 70.1 )
少 し 危 険	84 ( 28.9 )
危 険 で は な い	1 ( 0.3 )
わ か ら な い	1 ( 0.3 )
不 明	1 ( 0.3 )
合 計	291 ( 100.0 )

また、なぜ危険かについては、下の表13となっている。  
これによると、圧倒的に「子どもが車道側にいる」危  
険性を指摘する親が多くなっている。(9割以上)また、  
それに近い回答として「左側通行」「白線からでている」  
などをあげている。いづれにせよ、車が通り、ガードレ  
ールがなく、歩行者の歩く道路が狭い、こうした道路で  
幼児を連れて歩く場合は、やはり事故への危険性が高い  
わけで、そうした意味からいえば、ほとんどの親はこの  
場面での危険性を十分に認識していると思われる。しか  
し、その反面、この場面での危険性を理解できていない  
親も若干名いたことも明らかとなった。

「その他」の回答としては、「父親が子どもに気を配  
っていない」、「歩道に信号がない」などとなっている。

##### ③ ブランコに乗って遊ぶ子どもたち

公園などでよく見かける光景だが、ブランコに乗って  
遊んでいる子どもと、柵の内にいる子どもの様子を設定  
したものである。この写真については次のような結果と  
なっている。(表14)

表13 危険な理由 (M・A)

理 由	人 数 ( % )
1. 子どもが車道側にいる	261 ( 90.6 )
2. 左側通行している	32 ( 11.1 )
3. 子どもが白線から出ている	27 ( 9.4 )
4. 歩道が狭い、ガードレールがない	18 ( 6.3 )
5. 車にぶつかりそう	8 ( 2.8 )
6. 危険が理解されていない	4 ( 1.4 )
7. 親が車に注意していない	3 ( 1.0 )
8. そ の 他	3 ( 1.0 )
N・A	1 ( 0.3 )

N=288

表14

項 目	人 数 ( % )
大 変 危 険	208 ( 71.5 )
少 し 危 険	71 ( 24.4 )
危 険 で は な い	8 ( 2.7 )
わ か ら な い	2 ( 0.7 )
N・A	2 ( 0.7 )
合 計	291 ( 100.0 )

このブランコで遊ぶ子どもたちの場合も、事故への危  
険性を指摘している親の割合が、「大変危険」、「少し  
危険」をあわせると、95%に達している。その理由とし  
て次のようになっている。(表15)

この写真では、子どもがブランコにあたるという指摘  
が6割、柵内に子どもがいるが3割強となっている。ま  
た、柵内の子どもにはふれず、ブランコに乗っている子  
どもが立ってこいでいるのが危険とみる親が15%強みら  
れた。しかし、親の中にはこうした場面での事故にたい  
する十分な認識がみられないものも7名(2.5%)いた。

表15 (M・A)

理 由	人 数 ( % )
1. ブランコにあたりそう	165 ( 59.1 )
2. 柵内に子どもがいる	94 ( 32.3 )
3. 立ちこぎはよくない	44 ( 15.1 )
4. 危険が理解されていない	7 ( 2.5 )
N・A	2 ( 0.7 )
そ の 他	27 ( 9.7 )

N=279

ブランコは、子どもの好む遊具の一つであると同時に、事故発生率も他の遊具に比べ高い。(注1) そのため、子どもがブランコで遊ぶ場合は、側にいる親や保育者が十分に気をつけて、正しい乗り方、遊び方を指導する必要がある。

注1 「保育所の安全管理に関する研究」

「保育所の事故と安全管理」

厚生省母子福祉課 昭和63年

③ 浴室で遊ぶ子ども

日常生活の中でよくみられる場面として、浴室の浴槽で遊ぶ子どものケースを設定している。この場面における危険性の有無、たとえば、溺水や転倒などを親が認識しているかどうかをたずねている。下の表にその回答の結果をまとめてみた。(表16)

表16

項 目	人 数 ( % )
大 変 危 険	218 ( 74.9 )
少 し 危 険	60 ( 20.6 )
危 険 で は な い	4 ( 1.4 )
わ か ら な い	0 ( 0 )
N · A	9 ( 3.1 )
合 計	291 ( 100.0 )

「大変危険」「少し危険」とする浴室内の事故の発生に危険を感じている親が95%となっている。幼児の溺水による事故が多いことから、ほとんどの親が気をつけていることがこの結果から知ることができる。

その危険と思われる理由としては、次の通りである。

それによると、「浴槽に落ちそうで危険」、「溺れる」など、子どもの溺水にかかわる指摘が8割強となっている。また、「すべる」「転倒する」危険性をあげている親もみられた。

しかし、なかには「危険ではない」と回答している親も一部にみられ、今後の安全指導を進めていく上で留意すべき課題の一つといえよう。(表17)

④ 原っぱで遊ぶ子ども(絵)

ここでは、原っぱでボール遊びをしている子どもたちの絵をみて、危険性の有無と、もし危険と思われる箇所があればその内容についてたずねている。

まず、危険かどうかでは、次のようになっている。

(表18)

これによると、「大変危険」、「少し危険」の危険性有りと考える親の割合は9割を越え、大部分の親が事故へ

の危険性を認識している。同時に、この質問では「わからない」と回答した割合も他の問いに比べ、多くなっているのが特徴となっている。その内容は、次の通りであった。(表19)

危険性が高いと考えられることとしては、側にいる幼児に野球のボールがぶつかるのでは、という回答である。次いで、それとは別に、子ども同士の体がぶつかる危険性をあげている親も3割程いた。その他、小さい子が一緒に危い、ころがっている石が危い、などとなっている。また、他の質問と同様、全くこの場面での危険性が理解されていない親も一部みられた。

表17

理 由	人 数 ( % )
1. 浴槽に落ちそうで危険	128 ( 46.0 )
2. 溺れる	115 ( 41.4 )
3. すべって危険	19 ( 6.8 )
4. 火傷する	18 ( 6.5 )
転倒して頭などを打つ	18 ( 6.5 )
6. 年齢によっては危険	4 ( 1.4 )
危険が理解されていない	4 ( 1.4 )
そ の 他	19 ( 6.8 )
N · A	1 ( 0.4 )

N = 278

表18

項 目	人 数 ( % )
大 変 危 険	165 ( 56.7 )
少 し 危 険	106 ( 36.4 )
危 険 で は な い	4 ( 1.4 )
わ か ら な い	10 ( 3.4 )
N · A	6 ( 2.1 )
合 計	291 ( 100.0 )

表19

(M · A)

内 容	人 数 ( % )
1. 幼児にボールが当たる	186 ( 68.6 )
2. 子ども同士の体がぶつかる	92 ( 33.9 )
3. 小さい子が一緒に危い	62 ( 22.9 )
4. 石があって足元が危い	18 ( 6.6 )
5. 危険が理解されていない	8 ( 3.0 )
N · A	2 ( 0.7 )

N = 271



#### 4. 結 び

今回は質問紙による調査を行ない、以上のような結果となった。

細目については、すでに述べてきたので省略するが、全般的には幼児をもつ親の安全認識は予想通り高くなっている。また、危険にたいする認識や防止のための手だても一応理解されているものと思われる。

しかし、反面、写真と絵をつかった日常の生活場面では、その潜在する危険性を十分に理解できていない親が一部にみられ、今後、より一層の安全指導を働きかけて

いく必要性が認められる結果となった。

今後は、さらに、

- 1) 調査対象地域を広げる(地域差)
- 2) ある特定期間(たとえば夏休み中など)における事故やケガの実態
- 3) 事故を引きおこしやすい幼児の特性や親の養育態度

などを調査研究の課題にすえ、これからの安全指導に活かせるよう、その発生機序(メカニズム)の解明を図っていくこととする。

### Study on the Actual Condition of Present Children's lives

Taneaki TAKAHASHI, Susumu SUNAGA  
Sachiko SAITO,  
Michiko HOSHI, Reiko YUKAWA,  
Shuuji KAWASHIMA, Hidetoshi HAGIWARA

Recently, the accident has happened to the infants and it has become a major social problem. Not to cause the infant's accident, and in order to use the safety education, we put the research into action this time.

We used, this time, the study of methods were the questionnaire to evident the object. On questionnaire's paper, in particular, we're asking the answer by the photo and cartoon. It is the scene we can often be seen in a our life.

The results are as follows:

First, most of the parents were fully conscious of the importance of the safety for the accidents, and that they have always educated their children. They have, for instance, led not to play and come up the danger area, to keep the traffic rules.

On the contrary, it is cleared that some of the parents didn't realize the danger.

We'll, after this, need to pursue an investigation to the infant's accidents in the wider area and a special period (ex, summer vacation etc.) on the basis of these data.